

# 日本語はどんな言語か?—類型論的観点からの日本語\*

郡司 隆男

---

## What kind of language is Japanese?—From a typological point of view

GUNJI Takao

### Abstract

In this article, I will describe some of the major properties of Japanese from a typological point of view. In the first part, within the framework of generative grammar, which attempts to capture universality among natural languages, I will briefly review the framework of Baker (2001), who tries to highlight universality over individual languages by the concept of parameter. I will then consider the status of Japanese in this framework. In the second half, I will discuss the properties of long-distance reflexives, which behave similarly in some east Asian languages such as Japanese, Chinese, and Korean, as well as in some European languages

本稿では、類型論的観点から日本語の特徴のいくつかを概観する。前半では、人間の言語の普遍性を捉えようとする生成文法の考え方にに基づき、各個別言語を超えた普遍性をパラメータという概念によって浮かび上がらせようとした Baker (2001) の枠組を簡単に紹介した上で日本語の位置を確認する。後半では、日本語・中国語・韓国語などの東アジアの言語の一部および一部のヨーロッパの言語で似た振る舞いを示す長距離依存の再帰形の性質に考察を加える。

## 1. はじめに

一つの言語を他の言語と比較する方法として、類型論 (typology) という考え方が有用なことが明らかになっている。類型論は、世界の言語を少数の似た性質を共有するグルー

\*本稿は、2010年12月24日に育達商業科技大学(台湾)で開かれた「応用日本語国際シンポジウム: 台日韓の人文と社会科学の研究」での発表用原稿に加筆修正を施したものである。

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A)「推論機構の言語的実現とその解釈メカニズムに関する研究」(平成19年度~平成22年度、研究代表者: 田窪行則、課題番号19202012)および、基盤研究(B)「焦点・スコープ現象の統語・意味論的分析と音声実験・コーパス調査による検証」(平成21年度~平成24年度、研究代表者: 西垣内泰介、課題番号: 21320084))による援助を受けている。

プに分けることによって、言語研究における、普遍性と個別性のバランスをどうとるかという問題に関する1つの回答を与えている。

本発表では、類型論的な考え方の下に置くことによって、日本語という言語の特徴を明らかにしたい。

以下では、まず、人間の言語の普遍性を捉えようとする生成文法の考え方にに基づき、各個別言語を超えた普遍性をパラメータという概念によって浮かび上がらせようとした Baker (2001) の枠組を簡単に紹介した上で日本語の位置を確認する。

さらに、そこから発展する問題として、日本語・中国語・韓国語でほぼ似た振る舞いを示す長距離依存の再帰形の性質に考察を加えたい。

## 2. 類型論とパラメータ

### 2.1 形態論的類型論

類型論という考え方は、遅くとも19世紀には確立していたと思われる。古典的なのは、言語の形態的な特徴を基にした、Schleicher (1850) による次の3分類である。

- (1) a. 孤立語 — 個々の形態素が語としての独立性を保ち、語形変化や接辞を伴ったりしない。語と語の文法的関係は語順によって示される。中国語・チベット語など。
- b. 膠着語 — 内容をあらかず語幹に接辞をつけて、さまざまな文法機能をあらかず。日本語、韓国語など。
- c. 屈折語 — 主に語形や語尾の変化（屈折）によって、さまざまな文法的機能をあらかず。英語、ドイツ語など多くのヨーロッパ言語がこのタイプ。

ただし、暗黙のうちに、「孤立語 膠着語 屈折語」という道筋で言語が「進化」するという、ヨーロッパ優位の思想が感じられ、今日では、真剣に取り上げる言語学者は少ない。

### 2.2 統語論的類型論

20世紀後半になって、世界の各地域の言語の記述的研究、特に統語構造の研究が整備されるにつれて、文法の観点から言語のタイプ分けが可能となった。この分野における古典的な研究は、Greenberg (1963) による一般化である。

彼はまず、文の最も基本的な要素である、主語(S)、目的語(O)、動詞(V)という3つの要素がどのように配列されるかを調べ、論理的に可能な6つのパターンのうち、3つによってそのほとんどが尽くされることを発見した。

- (2) a. SOV — 日本語、韓国語など (45%)
- b. SVO — 英語、中国語など (37%)
- c. VSO — アラビア語、アイルランド語など (18%)

このうち、主語が文頭にくる言語は SOV, SVO の 2 つであり、合わせて 80% を越える。さらに、主語以外の要素のどちらが先に来るかを見ると、ほぼ均等に 2 つのタイプに分かれることがわかる。

- (3) a. VO 型: 英語、中国語、アラビア語、アイルランド語など (55%)  
OV 型: 日本語、韓国語など (45%)

さらに、VO 型、OV 型のそれぞれは、他の文法要素の配列に関しても共通の性質をもつ。

- (4) a. VO 型言語は圧倒的に前置詞をもち、OV 型言語は圧倒的に後置詞をもち。  
b. VO 型言語では圧倒的に連体修飾語 (句) が名詞に後続し、OV 型言語では圧倒的に連体修飾語 (句) が名詞に先行する。  
c. 疑問文を作るときに、VO 型言語では文頭に印を付けることが多く、OV 型言語では文末に印を付けることが多い。  
d. 動詞の屈折をあらわす辞や助動詞は、VO 型言語では動詞に先行し、OV 型言語では動詞に後続する。  
e. 比較構文の「～より」に相当する要素は、VO 型言語では形容詞に後続し、OV 型言語では形容詞に先行する。  
f. VO 型言語では接頭辞によって形態上の変化を表わし、OV 型言語では接尾辞によって形態上の変化を表わす。

Greenberg の観察はあくまでも傾向であり、そのまま 100% 例外なしに成り立っているわけではない。日本語は、ほぼ 100% OV 型言語の特徴を示しているが、英語のように、動詞と目的語との関係においては VO 型であっても、形容詞のような連体修飾語が名詞に先行するような言語もある。

VO 型言語、OV 型言語のそれぞれにおいて、V と同じ位置 (VO 型言語の場合には先行する位置、OV 型言語の場合には後続する位置) にあらわれるものが中心となって、より大きな句を作る。動詞に目的語がつけば動詞句になるし、名詞に連体修飾語がつけば名詞句ができる。このように、より大きな句を作るときに中心となるものを主要部 (head) と言う。Greenberg の観察は、主要部の位置に関して、先行型と後続型というように、タイプが 2 つに分かれるということである。

### 2.3 パラメータ類型論

1980 年代以降の生成文法では、世界中の言語に共通の普遍文法というものを仮定し、それに付随するいくつかのパラメータの値の設定のしかたで個別言語の文法になっている。上の Greenberg の観察は、この観点からは主要部パラメータの発見ということになる。今までに提案されたパラメータの例のいくつかを下に挙げる。

- (5) a. 主要部パラメータ: 主要部先行 vs. 主要部後置

- b. 一致パラメータ: 一致のある言語 vs. ない言語  
一致とは、主語や目的語の項の数・人称・性などに応じて動詞の語尾の形が変わる現象であり、英語の三人称単数現在形の動詞の語尾の -s などがその例である。
- c. 空主語: 主語などの文法要素の省略を許さない言語 vs. 許す言語  
日本語では主語や目的語のない文でも文法的な文とされるが、英語では主語は義務的であり、目的語も多くの場合省略できない。

### 3. 日本語の位置

#### 3.1 『言語のレシピ』

Mark Baker の *Atoms of Language* (Baker, 2001) は上のパラメータ類型論を極限にまで押し進めたものであると考えられる。彼によると、図 1 に示すように、日本語を含む 23 の言語が次の 11 のパラメータによって、階層的な関係をなす 13 のグループに分けられている。

以下に日本語に関係するものを中心に、上述のパラメータのいくつかの概略と関係する言語の例を挙げる。

#### A 多総合性パラメータ (polysynthesis parameter)

動詞は、その動詞によって記述される出来事の主要な関与者（主語、目的語、間接目的語）を個々にあらわす何らかの表現を含んでいないといけない。

- (6) モホーク語: Washakotya'tawitsherahetkvhta'se'.  
英語: He made the thing that one puts on one's body [i.e., the dress] ugly for her.

モホーク語では一語として分析される語が、同じ内容を英語で言おうとすると、13 語必要とされる。

#### B 主要部方向性パラメータ (head directionality parameter)

より大きな句を作るときに、主要部が句の最初/最後にくる。

- (7) a. 英語: I heard rumors that the president will resign.  
日本語: 私は社長が辞めるといふ噂を聞いた。
- b. 英語: A monster emerged from under the table.  
日本語: テーブルの下から怪物が出てきた。

(7a) に見るように、英語では名詞句の主要部（主名詞）rumors が関係節の前にくるが、対応する日本語では主名詞の「噂」が関係節の後にくる。(7b) では、英語では前置詞が前置詞の前にくるのに対し、対応する日本語では後置詞（助詞）が「下」を含む名詞句の後にくる。

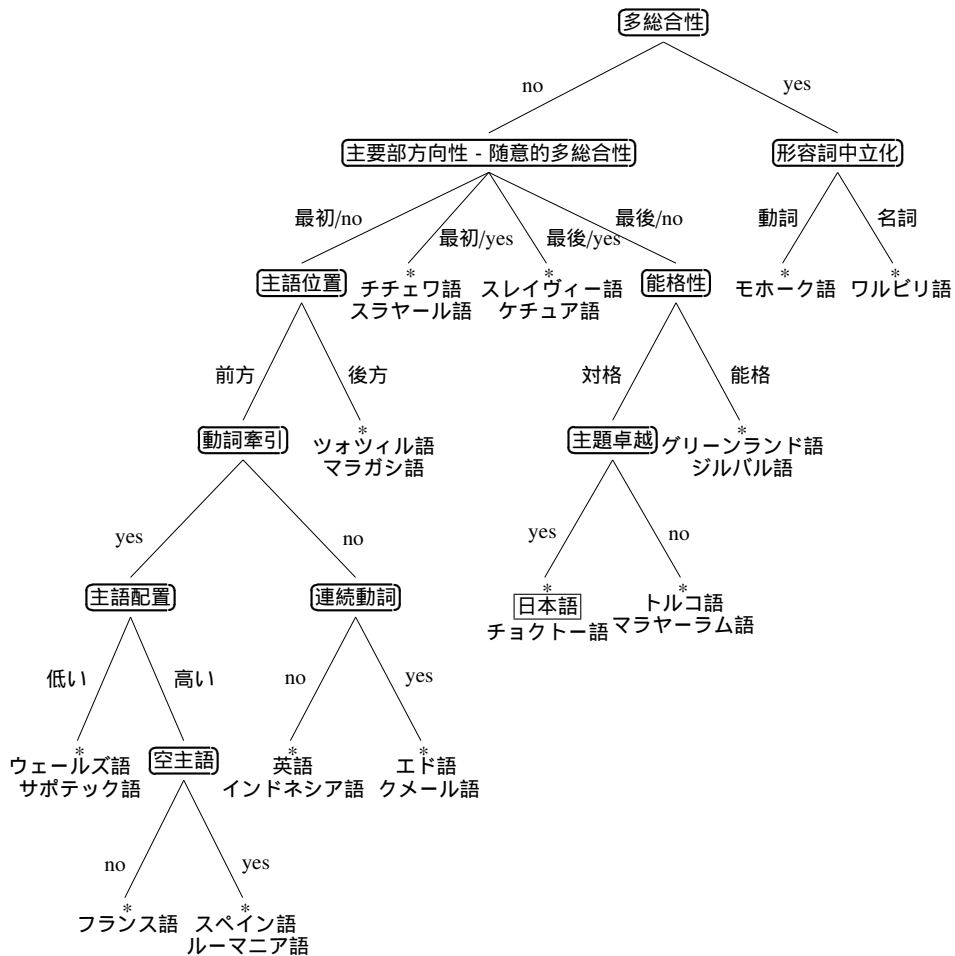


図 1: パラメータの階層 (Baker, 2001, Fig. 6.4)

## C 随意的多総合性パラメータ (optional polysynthesis parameter)

出来事のどの関与者でも動詞上にあらわされてよい。

## (8) チチェワ語

- a. Njuchi zi-na-luma alenje. [ 目的語との一致なし ]  
Bees they-bit hunters
- b. Njuchi zi-na-wa-lum-a alenje. [ 目的語との一致 (wa) あり ]  
Bees they-bit-them hunters  
(ハチは獵師を噛んだ [ すなわち、刺した ] .)

チチェワ語では、動詞の主語との一致は義務的であり。動詞の中に対応する形態素があらわれないといけませんが、目的語との一致は義務的ではないので、「噛む」に対応する動詞の形が2通りある。

#### D 能格パラメータ (ergative case parameter)

すべての主語の格標識が等しい(対格言語)か、自動詞の主語の格標識が他動詞の目的語の格標識と等しい(能格言語)。

##### (9) グリーンランド語

- a. Juuna-p atuaga-q miiqqa-nut nassiuppaa.  
 Juuna-su book-DOV child-IOV send  
 日: ジューナが本を子どもたちに送った。  
 英: Juuna sent a book to the children.
- b. Atuaga-q tikissimangilaq.  
 Book-OB? hasn't-come  
 日: 本がまだ来ていない。  
 英: A book hasn't come yet.

能格言語であるグリーンランド語では、他動詞 *nassiuppaa* (送る) の目的語の *atuaga* (本) の格標示と、自動詞 *tikissimangilaq* (来ていない) の主語となっている *atuaga* (本) の格標示がともに *-q* となっている。日本語や英語は対格言語であり、目的語の格(日本語ならば「~を」)と主語の格(日本語ならば「~が」)とは異なる。上の対応する英語文では *a book* の格が形の上からはわからないが、次のように複数代名詞にしてみると明らかになる。

- (10) a. Juuna sent *them* to the childre.  
 b. *They* haven't come yet.

#### E 主題卓越パラメータ (topic prominent parameter)

文が、冒頭の名詞句(主題)と、主題に対するコメントとして理解される完全な節とからなる。

##### (11) 日本語

- a. この本はジョンが読んだ。  
 ‘Speaking of this book, John has read it.’  
 (この本について言えば、ジョンがそれを読んだ。)
- b. 魚は鯛がおいしい。  
 ‘[Speaking of] fish, red snapper is delicious.’  
 (魚[について言えば] 鯛がおいしい。)

日本語の「は」は主題をあらわす標識であり、主格の「が」があらわれる位置にあらわれ、通常的主語 - 述語文と同じような構造で文を作ることができる。(11a)に見るように、「は」は目的格の「を」があらわれる位置にもあらわれるが、文の構造は依然として「この本は」と「ジョンが読んだ」からなる、主述構造に準じた形となっている。また、

(11b)の「魚は」に見るように、主語でも目的語でもなく、動詞の項としてはあらわれな  
いものも主題として文頭に置くことができる。対応する英語の訳文では、主題の部分  
を副詞的修飾節としてあらわすしかない。

#### F 主語位置パラメータ (subject side parameter)

主語が文の前方/後方にくる。

##### (12) ツォツィル語:

?i-yal-la ta te? ti vinik-e.

PAST-descend from tree the man

日: その男は木から降りてきた。

英: The man came down from the tree.

上のツォツィル語の文では、動詞がまずあらわれ、文の最後に主語があらわれている。  
日本語と英語の対応する文では主語は文頭にくる。

#### G 動詞牽引パラメータ (verb attraction parameter)

時制の助動詞が動詞を自分の位置に引き寄せる。

##### (13) a. フランス語: Jean a souvent embrassé Marie.

英語: John has often kissed Marie.

日本語: ジョンはしばしばマリーにキスをした。

##### b. フランス語: Jean embrasse<sub>i</sub> souvent t<sub>i</sub> Marie.

英語: John t<sub>i</sub> often kisses<sub>i</sub> Marie.

日本語: ジョンはしばしばマリーにキスをする。

(13a)に見るように、フランス語でも英語でも、完了の助動詞が存在する場合には副詞  
がそれに続き、動詞は副詞より後にくるが、(13b)のように、助動詞の位置に現在時制  
があって、動詞と一体化して現在形の動詞として文中にあらわれる場合、フランス語で  
は動詞が現在時制の位置に移動して副詞より前にくる ( $t_i$  は移動した後の痕跡をあらわ  
す)。一方、英語では現在時制が動詞の位置に移動して、一体化した現在形の動詞は副詞  
より後にあらわれる。なお、日本語では時制 (の助動詞) や動詞が移動することはない  
ので、(13a) と (13b) とで違いはない。

#### H 連続動詞パラメータ (serial verb parameter)

1つの動詞句に複数の動詞が含まれていてもよい。

##### (14) エド語

Òzó ghá lè èvbàré khièn.

オゾ(未来)料理する 食物 売る

‘Ozo will cook the food and sell it.’

(オゾは食物を料理して売る。)

上のエド語の文では、一文中に動詞が2つあり、目的語を共有している。英語のように接続詞もなく、単に動詞が連続してあらわれている。

Baker は挙げていないが、日本語でも、次のような複合動詞は連続動詞の一種と考えられる。(15a)の例は目的語を、(15b)の例は主語を共有している。<sup>1</sup>

- (15) a. (糊を)煮溶かす、(ほこりを)たたき出す、(糸を)巻きつける  
 b. (彼らが)泣き崩れる、(皆が)歩き疲れる、(我々が)飲み歩く

以上8つのパラメータに関して、日本語と他の言語、例えば英語、との間でその値を比較してみると次のようになる。太字で示したところからわかるように、8つのうち5つまでが同じ値となっており、日本語と英語は実はかなり共通性の多い言語どうしであることがわかる。。

(16) 英語と日本語のパラメータ対応

パラメータ	A	B	C	D	E	F	G	H
英語	x	最初	x	対格			x	x
日本語	x	最後	x	対格	x		x	

#### 4. 長距離依存の「自分」

本稿の後半では、いくつかの言語に共通すると思われる性質をとりあげ、一つのパラメータとする可能性があることを示唆しておきたい。

代名詞の中でも、文中の主語ないし卓越する要素を指すものに再帰代名詞がある。日本語では「自分」「自分自身」「彼女自身」などがそれにあたる。以下このような表現をまとめて「再帰形」と呼ぶことにし、具体例としては「自分」という形をとりあげることにする。

東アジアの言語の中の日本語の「自分」、中国語の *ziji*、韓国語の *caki* など、あるいは、いくつかのヨーロッパの言語の再帰形は、英語の対応するもの (*myself*, *yourself*, *herself* など) と比較して、先行詞が狭い領域内に限られないという性質をもつ。

- (17) a. 奈緒美<sub>i</sub> が健<sub>j</sub> が自分<sub>i,j</sub> のために書いた本を買った。  
 b. Naomi<sub>i</sub> bought a book that Ken<sub>j</sub> wrote for himself<sub>j</sub> / \*herself<sub>i</sub> / her<sub>i</sub>.

上の例では、日本語の主文の主語「奈緒美」も埋め込み文の主語「健」も「自分」の先行詞となり得るが、英語の主文の主語 Naomi は埋め込み文中の *herself* の先行詞とはなり得ない。

中国語も長距離依存の再帰形をもつが、この言語には阻害効果 (*blocking effect*) と呼ばれる現象があることが知られている (Huang & Tang, 1991, など)。Huang and Tang を批判的に取り上げている Pan (2001, (34)) は次のような例を挙げている。

<sup>1</sup>他に、1 番目の動詞の主語と 2 番目の動詞の目的語が共有される「(大根が)煮崩れる」のような例もあり、本稿ではとりあげないが、日本語の複合動詞の振る舞いはかなり複雑である。



- (18) a. John<sub>i</sub> yiwei Bill<sub>j</sub> xihuan ziji<sub>i,j</sub>.  
John think Bill like self  
'John<sub>i</sub> thinks Bill<sub>j</sub> likes him<sub>i</sub>/himself<sub>j</sub>.'
- b. John<sub>i</sub> yiwei [naben shu]<sub>j</sub> hai-le ziji<sub>i,\*j</sub>  
John htink that-CL book hurt-Perf self  
'John<sub>i</sub> thinks that book<sub>j</sub> hurt him<sub>i</sub>.'
- c. John<sub>i</sub> yiwei wo/ni<sub>j</sub> xihuan ziji<sub>\*i,j</sub>.  
John think I/you like self  
'John<sub>i</sub> thinks I/you<sub>j</sub> like himself<sub>\*i</sub>/myself<sub>j</sub>/yourself<sub>j</sub>.'
- d. Wo<sub>i</sub> yizhi yiwei Bill<sub>j</sub> xihuan ziji<sub>i,j</sub>, keshi wo zuo le.  
I always think Bill like self but I wrong Prt  
'I<sub>i</sub> always think Bill<sub>j</sub> likes me<sub>i</sub>/himself<sub>j</sub>, but I was wrong.'

(18c) に見るように埋め込み文の主語が一人称・二人称の場合、主文の主語が ziji の先行詞とはなることができない。<sup>2</sup>

一方、対応する日本語文を「自分」で考えてみると、次のように、微妙に異なった振る舞いを見せる。

- (19) a. ジョン<sub>i</sub> はビル<sub>j</sub> が自分<sub>i,j</sub> のことが好きだと思っている。  
b. ジョン<sub>i</sub> はその本<sub>j</sub> が自分<sub>i</sub> を傷つけると思っている。  
c. ジョン<sub>i</sub> は僕/君<sub>j</sub> が自分<sub>i,j</sub> のことが好きだと思っている。  
d. 僕<sub>i</sub> はいつもビル<sub>j</sub> が自分<sub>i,j</sub> のことが好きだと思っていたが、間違っていた。

<sup>2</sup>Huang and Tang (1991, p. 277, (45a)) によれば、阻害効果は、人称・数の異なる埋め込み文の主語が介在する場合に起こるとされているので、埋め込み文の三人称主語が二人称主語を阻害することも可能であり、次のような例をあげている。

- (i) Ni shuo Zhongsan chang piping ziji  
you say Zhongsan often criticize self  
'You said that Zhongsan often criticized himself'

Pan (2001, p. 283, (6), (7)) はこのような、三人称主語が一人称・二人称を阻害することもあるという主張に異義を唱えており、次のような反例を挙げている。

- (ii) a. Wo<sub>i</sub> zhidao Lisi<sub>j</sub> bu xihuan ziji<sub>i,j</sub>.  
I know Lisi not like self  
'I knew that Lisi did not like me/himself.'
- b. Ni<sub>i</sub> xiang mei xiang guo Lisi<sub>j</sub> conglai jiu mei xihuan guo ziji<sub>i,j</sub>?  
you think not think Guo Lisi never conj not like Guo self  
'Have you ever thought about the idea that Lisi never liked you/himself?'
- (iii) a. Wo<sub>i</sub> bu xihuan Lisi<sub>j</sub> guan ziji<sub>i,j</sub> de shi.  
I not like Lisi interfere self De matter  
'I don't like Lisi interfering in my (own) business.'
- b. Ni<sub>i</sub> xihuan Lisi<sub>j</sub> guan ziji<sub>i,j</sub> de shi ma?  
you like Lisi interfere self De matter Q  
'Do you like Lisi interfering in your (own) business?'

Pan (2001) によれば、阻害効果は先行研究が示唆するような対称的な（一人称・二人称が三人称を阻害するだけでなく三人称が一人称・二人称を阻害することもある）ものではなく、一人称・二人称のみが阻害者になり得る。

日本語の場合、いずれにしても、(19c) に見るように、中国語と同じような阻害効果はないので、このような立場の違いは本稿の論旨には影響しない。

日本語では、(19c)に見るように、埋め込み文の一人称・二人称の主語は主文の三人称主語が先行詞となることを阻害しない。

日本語でも、主語でありながら先行詞とはならない例文が存在する。(17)の埋め込み文の主語を「僕」に変えた次の(20)では、主文の主語「奈緒美」が「自分」の先行詞とはなりにくく、阻害効果があるかのように見える。

(20) 奈緒美<sub>i</sub>が僕<sub>j</sub>が自分<sub>\*i,j</sub>のために書いた本を買った。

しかし、(19c)とは異なり、(20)の「自分」の解釈が「奈緒美」とはなりにくいのは、埋め込み文に一人称主語が介在するという阻害効果とは別の原因によると考えられる。

日本語の「自分」の分析に際しては、従来より、「談話性」(logophoricity)という考え方が有用だと考えられている(Kuno, 1972; 久野, 1978; Kameyama, 1984; Sells, 1987; Iida, 1992; Bresnan, 2001, among others)。例えば、久野(1978, p. 213, (30))は次のような制約を提案している。

(21) 「自分」の話者指示詞的用法

発話、思考、意識等を表わす動詞に従属する節の中で用いられる「自分」は、その発話、思考、意識の発話者、経験者を指す機能を持つ。

この用法により、主語以外が先行詞となっているように見える例文(郡司, 2002, pp. 14-15, p. 158)の振る舞いは説明可能である。

(22) a. 健の自慢は自分の学歴だ。

b. 健がまた叱られた。自分が悪いのだから当然だ。

c. 自分の不注意の結果の事故が健を後悔させた。

(22a)では主語は「健の自慢」であり、(22b)はそもそも文境界を越えている。(22c)では「健」は「後悔させた」の目的語であり、主語は「自分の不注意の結果の事故」になる。<sup>3</sup>

郡司(2001)で紹介したように、談話性は日本語以外の言語にも見られる。Clements(1975)によると、西アフリカの言語の1つEweでは、一般の代名詞と談話性代名詞が区別されている。

<sup>3</sup>(22a)のようなタイプに文に対しては、Hiraiwa and Ishhara(2002)のように、「~のだ」文と関連付けて一種の分裂文(specification statement)として統語論的に扱う試みがある(西垣内泰介, pcの指摘による)。本稿では、統語論的あるいは意味論的に形式的な分析を示すところまでは至らないので、そのような試みの検討は、郡司(2010)の分析と融合することも含めて、将来の課題としたい。その場合、次のような事実までも扱える必要があるだろう。

1. 文境界を越える可能性があること

(i) 健には自慢していることがある。(それは)自分の学歴だ。

2. 全く同じ構文であっても、「自分」の先行詞となるためには冒頭の名詞句が談話性をもつ必要があること。以下では「弁護人」の場合には「自分」の先行詞は主文の主語である「奈緒美」という解釈が優先的だが、「悩みの種」のような談話性の高い名詞の場合には主語でなくても「健」を先行詞とする解釈が可能である(郡司・坂本, 1999, p. 44, (19f,g))。

(ii) a. 奈緒美<sub>i</sub>が健の弁護人は自分<sub>j</sub>の息子だと言った。  
b. 奈緒美<sub>i</sub>が健<sub>j</sub>の悩みの種は自分<sub>i</sub>の息子だと言った。

- (23) a. Kofi be me-dzo.  
Kofi say PRO-leave  
'Kofi said that I left.'
- b. Kofi be yè-dzo.  
Kofi say LOG-leave  
'Kofi said that he (= Kofi) left.'
- c. Kofi be e-dzo.  
Kofi say PRO-leave  
'Kofi said that he/she (≠ Kofi) left.'
- d. Kofi lɔ̃ e ɸokui.  
Kofi love PRO self  
'Kofi loves himself.'
- e. Kofi be yè-lɔ̃ yè ɸokui.  
Kofi said LOG-love LOG self  
'Kofi said that he (= Kofi) loves himself.'

Ewe では、e が一般の三人称代名詞、yè が談話性の代名詞であり、発話内容の中の発話者自身を指す場合には yè を用い ( (23b) )、発話者以外の人を指す場合には e を用いる ( (23c) )。再帰代名詞は、代名詞の後に ɸokui をつけて作られるが、談話性の文脈でなければ一般の代名詞とともに ( (23d) )、談話性の文脈ならば談話性の代名詞を用いる ( (23e) )。

Ewe では、be は本来補文標識だが、上のグロスに見るように、語者を示すマーカーとして、「言う」という意味の動詞のような振る舞いをしている。<sup>4</sup>

日本語でも同じような現象が見られる。次の「って」を含む文を検討してみよう。通常の文脈では一人称・二人称代名詞で指される者は典型的な「発話、思考、意識の発話者、経験者」だが、次のような文では三人称である「奈緒美」が「自分」の先行詞となることができる。

- (24) 奈緒美<sub>i</sub> ちゃんなぜ泣いているの?
- a. 健ちゃん/みんなが自分<sub>i</sub> よりいい点を取ったんだって言ってるよ。
- b. 健ちゃん/みんなが自分<sub>i</sub> よりいい点を取ったんだって。
- c. 僕が自分<sub>i</sub> よりいい点を取ったんだって。

(24a) では、省略された「奈緒美」が「言っている」の主語であるので、「自分」が主文の主語を指していると考えられる。面白いのは (24b) であり、「だって」で文が終わっているのに、「主文の主語」の存在が考えにくい、「いい点を取った」と思っている/言っているのは奈緒美だから、「自分」が奈緒美を指すことができる。三人称主語の「健ちゃん/みんな」を「僕」に変えた (24c) でも、「自分」は奈緒美を指すことができるので、日本語では、「自分」の談話指示的用法では、阻害効果より談話性の方が強く働くようであ

<sup>4</sup>Ewe の統語論・意味論の詳しい分析は、Orita (2009) およびそこで挙げられている文献を参照。

る。「って」というのは「と」の変形したものであり、Ewe の be と同様の補文標識であるが、談話性を示す有用なマーカーとなっていることがわかる。

このように、再帰形の長距離依存についても、阻害効果と談話性の相対的強さという形のパラメータで区別できる可能性がある。<sup>5</sup>

日本語の「自分」にはすでに数多くの研究があるが、次のような例文も含めて統一的な分析を与えるには、まだ研究し尽くされたというには早いだろうと思う。

「くれる」—「って」による視点の設定

(25) みんなが自分のことわかってくれないんだって。

「くれる」は話者の視点に立つことを示す標識だが「って」があることにより、この場合の「話者」は、文全体の語り手（一人称）でなく、語り手が伝聞した情報源であることが示されている。そのため「自分」の先行詞もその情報源となる。

「自分」の束縛 — 主語相当の束縛子の存在

(26) 自分のことは自分でしなさい!

命令文では命令の対象である聞き手が動詞の実行者になる。そのため、「自分」の先行詞も、直接言及されることの少ない聞き手である。

「自分」の単数名詞性

次のような文は一見、日本語にも中国語と同じような阻害効果があるかのように見える。

(27) 彼ら<sub>i</sub>が健/僕<sub>j</sub>が自分<sub>i,j</sub>の本を粗末にしていると言っている。

しかし、これは「自分」が単数の先行詞しかとれないためであり、主文の主語を単数名詞にすると、両方の解釈が可能である。

(28) 奈緒美<sub>i</sub>が健/僕<sub>j</sub>が自分<sub>i,j</sub>の本を粗末にしていると言っている。

次の (29a) に健と奈緒美のそれぞれがそれぞれの本を読んだという解釈しかないのもそのためである。(29b) では「健と奈緒美の共有する本」という解釈も可能となる。

(29) a. 健と奈緒美が自分の本を読んだ。

b. 健と奈緒美が自分たちの本を読んだ。

## 5. おわりに

本稿では、パラメータ類型論の中で日本語にどのような性格付けができるかを概観した。Baker の階層で、同じ東アジアの言語である中国語や韓国語がどの位置を示すかは

<sup>5</sup>中国語に関しても、Huang and Liu (2001) のように談話性に注目した研究もあるが、本稿で触れたような違いは日本語と中国語との間に残る。

明らかでないが、最後に、長距離依存の再帰形の振る舞いを考察し、中国語などの言語との共通性と相違点を明らかにした。

紙幅の都合上踏みこんだ分析を示すことはできなかったが、本稿で指摘した現象およびそれに付随する現象について、また機会をあらためて論じたい。

### 参考文献

- Baker, Mark C. (2001). *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. Basic Books, New York. 郡司 隆男 訳 『言語のレシビ』 岩波書店, 2003, 岩波現代文庫版, 2010.
- Bresnan, Joan (2001). *Lexical Functional Syntax*. Basil Blackwell, Oxford.
- Clements, George N. (1975). The logophoric pronoun in Ewe: its role in discourse. *Journal of West African Languages*, **10** (2), 141–177.
- Greenberg, Joseph H. (1963). Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In Greenberg, Joseph H. (Ed.), *Universals of Language*, pp. 73–113. MIT Press, Cambridge, Mass.
- 郡司隆男・坂本勉 (1999). 『言語学の方法』. 岩波書店, 東京.
- 郡司隆男 (2001). 日本語文法—多様な観点から—. 『日本語文法』, **1**, 70–89.
- 郡司隆男 (2002). 『単語と文の構造』. 岩波書店, 東京.
- 郡司隆男 (2010). 再帰化再考. *TALKS (Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin)*, **13**, 1–14.
- Hiraiwa, Ken & Ishhara, Shinichiro (2002). Missing links: cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. In Ionin, Tania, Ko, Heejeong, & Nevins, Andrew (Eds.), *Proceedings of HUMIT 2001*, No. 43 in MIT Working Papers in Linguistics, pp. 35–54. Cambridge, Mass.
- Huang, C.-T. James & Liu, C.-S. Luther (2001). Logophoricity, attitudes, and *ziji* at the interface. In *Syntax and Semantics, Volume 33: Long-Distance Reflexives*, pp. 141–195. Academic Press, San Diego.
- Huang, C.-T. James & Tang, C.-C. Jane (1991). The local nature of long-distance reflexive in Chinese. In Koster, Jan & Reuland, Eric (Eds.), *Long-Distance Anaphora*, pp. 263–282. Cambridge University Press, Cambridge.
- Iida, Masayo (1992). *Context and Binding in Japanese*. Ph. D. dissertation, Stanford University. Published from CSLI in 1996.

- Kameyama, Megumi (1984). Subjective/logophoric bound anaphora *zibun*. *Proceedings of the Chicago Linguistic Society*, **20**, 228–238.
- Kuno, Susumu (1972). Pronominalization, reflexivization, and direct discourse. *Linguistic Inquiry*, **3**, 161–195.
- 久野 暲 (1978). 『談話の文法』. 大修館書店, 東京.
- Orita, Naho (2009). Syntax and Semantics of Logophoricity in Ewe. Master's thesis, Kobe Shoin Women's University, Kobe.
- Pan, Haihua (2001). Why the blocking effect?. In *Syntax and Semantics, Volume 33: Long-Distance Reflexives*, pp. 279–316. Academic Press, San Diego.
- Schleicher, August (1850). *Die Sprachen Europas in systematischer Uebersicht: Linguistische Untersuchungen*. H. B. Koenig, Bonn. New edition with an introductory article by Konrad Koerner, Amsterdam, John Benjamins published in 1983.
- Sells, Peter (1987). Aspects of logophoricity. *Linguistic Inquiry*, **18**, 445–479.

**Author's E-mail Address:** gunji@shoin.ac.jp

**Author's web site:** <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>